掲載日:2016年03月01日，面名:，記事ID:KIJ20160301_01025000A00101002

(C)神奈川新聞社

縁のものがたり ◇上◇

@アンプティーボーイ

失ったのではなく

たぶん、5秒にも満たなかった。ピッチに立ったら、すぐに終了のホイッスルが鳴った。ボールに触ることもできなかった。

それが日本最年少の「アンプティーサッカー選手」のデビューだった。足や手を失った人がプレーするこの競技の全国大会、日本選手権の決勝戦だった。2014年10月。石井賢くんは小学2年の7歳だった。

その一瞬を見つめる女性カメラマンがいた。「あの子、試合に出たんだ」。飽きていたのか、試合中にジャージー姿でベンチに寝転んだりしていた。大人に交じった小さな子に、なぜかひかれるものがあった。

「スポーツとしても興味が湧いたし、子どもの10年と大人の10年は違う。彼の成長を撮ってみたいと思った」

鳥飼祥恵さん(33)はチームを通し、賢くんの母を紹介してもらった。事故で片足を失った息子を持つ母親。デリケートな展開も覚悟していた。

初対面の喫茶店。気づけば2時間以上がたっていた。「事故や苦労より、お母さんがなんでこんなに明るいのかと圧倒された」。石井督子さん(45)との、姉妹か友人かのような関係が始まった。

13年6月19日の夕方だった。事故を知らせる電話が鳴り、督子さんは病院に駆け付けた。

川崎市宮前区南平台。賢くんは一人で学校から帰る途中だった。居眠り運転の乗用車が、正面から歩道に乗り上げてきた。頭蓋骨骨折に肺挫傷、命に危険があった。何より左足の状態が末期的だった。

縫合することも考えられた。しかし、回復可能性は低かった。最終的な結論は膝から下の切断だった。苦渋の手術を終えた執刀医が告げた。「彼が自分の娘だと思って、手術をしました」。医師にも小学1年生の子がいた。ベストを尽くしてくれたと信じられた。

4日後に意識を取り戻した。そして1週間後、医師や臨床心理士と相談しながら、事実を告げた。「怖い、怖い」。おびえる様子に、いったんは説明を取りやめた。次の日、また話をした。今度は最後まで、じっと耳を傾けていた。

「本人も不安があったはず。子どもなんだし、何で自分がと物に当たったり、わがままを言ったりしてもよかった。でもこの子はそうしなかった。なんて強い子だろうと思った」

後日、看護師に一度だけこんなことを言ったと聞いた。「僕をひいた人が来たら、やっつけてね」。息子なりの葛藤、無念を思うと、自分が弱音を吐くわけにはいかないと思った。

「もちろん事故に遭ってほしくなかった。でも、賢は強運だなと思う。だって、あの事故からは悪いことが一つも起きていない。出会う人はみんないい人ばかり。そうか、彼は選ばれた人なんだって。そうだ、そう思おうって」

母として、後悔がないと言ったらうそになる。あの日、自分が学校まで迎えに行けば。例えばお使いに行かせていれば。「何度も自分を責めた。でも私が元気をなくせば、賢に『僕ってそんなに大変なのか』と思わせてしまう。だから、賢の前では『普通』でいようって」。事故当日、未明に帰宅してシャワーを浴びて大泣きした。それっきりにした。〝人を圧倒するほど明るい母〟になった。

賢くんは3カ月後に退院した。車いす、松葉づえ、義足。少しずつ前に進んだ。大好きな学校でめいっぱい遊んだ。松葉づえで「ドロケー」をやったし、徒競走は義足で走った。

そして、アンプティーサッカーのチーム「アウボラーダ川崎」に出合った。カメラマンの鳥飼さんとの縁も、つながった。

その密着は週末の練習、遠征、大会にまで及ぶ。「先入観は捨て、こちらが『悲劇を乗り越えて』なんていう物語を作ってはいけないと決めていた。そのままを撮ろうと」。保存したカットは数万枚に達した。

勇姿はもちろん、大人にじゃれつくあどけなさ、ふてくされている姿など、ありのままの少年が切り取られている。「撮っているとわかるんですよ。賢くんは、よっぽどお母さんのことが好きなんだなあって」。時に駄々をこね、時に甘えて。愛に包まれた子の日々が、レンズに映った。

「amputee boy―けんちゃん―」と名付けた30枚の写真は、15年の「名取洋之助写真賞」(日本写真家協会)を受賞した。35歳以下が対象の同賞は登竜門的な意味合いがある。写真家として、大きな一歩となった。

授賞式で、余興として抽選会があった。賢くんがカメラバッグを当てた。照れくさそうに近づいてきた。

「これ、あげるよ」

涙が出るくらいうれしかった。「あれは彼なりのおめでとうだったんだと思う」。写真の考え、技術、構図、対象との距離の取り方…。カメラマンとして迷いのある部分もあった。「でもこの賞で、写真家として生きていく道筋が見えた気がした」

受賞に際して、協会にこんな文章を寄せた。

〈「賢は強運の持ち主なんです」。お母様に初めてお会いした時、こんな言葉をもらいました。正直戸惑いました。しかし、今はその意味が明確に理解できます。きっと今回の受賞も、彼の強運にあやかったのだと思います〉

片足を失ったアンプティーボーイは、他人の人生を変えたのだった。

(佐藤　将人)

大人たちに見守られながらボールを追う賢くん（鳥飼さん撮影の「amputee boy―けんちゃん―」から）

談笑しながら賢くんの練習を見つめる母の督子さん（左）とカメラマンの鳥飼さん